



野槌

上三四



門 1 曾 4  
775  
228



あはれ事い月ふるふしうるぐさむねわかれあは  
人の月がかりわたりうよおあじとひひ  
又うより病こそあわれあまそあうそひし  
おしとれおみあれは何うあまれなうさ  
月夜いれ也風のこころ人ふんを流くあ終  
あふみらぐけて清く流る水は身をこころ  
つぞめそいられ沈湘日夜東に流去愁人の為  
よとてかこくあゆもさずやうらわるとんたり  
しこそわかれありしう愁康も山澤ふあさび  
て鳥鳥をいれわたのあふくしう人上級く  
水草あきよたほりしうあひあうさうるた  
うりんねさむしとあ



沅湘日夜 三休詩戴叔倫詩沅湘日夜東流  
去不為然人何少時注云身不得去故然水之  
去所以深傷已之不他去也蓋叔倫事曹王於  
湘湘故有是作秦少游謫郴別有詞云郴江  
幸遶郴山為誰流下涕湘水正用此意

沅湘 沅水湘水有水名

嵇康也山澤小好也 又選四十三嵇康

與山濤純文書云游山澤觀魚鳥心甚樂之  
一行作吏此事便廢安能捨其所樂而從其  
所懼哉 嵇康字叔夜竹林七賢の其一人也  
晉書よ傳あり  
人をもく水草きよ

玄賓宿都れあよ

とて四のあまきうととてげさむは内すまぬはれ  
は後月病風あどあうのあまきうととておせり  
李白が廬山の瀑布とて東坡の赤壁よあまひ  
句氣ありあうも末よとやはくもとて山林よ  
たぶとんはかぐみとて水なり

何事もあつた世のこぞあつたりよとやうい  
ふとよとやういふと成ゆくりれかの本は及乃  
たぐみのほくもあうつうとてうついの名を  
代の姿うそあうとて人の名を又の詞をくそ有れ  
及たよといふとあうとてよとてよとてよとて  
ありもてゆくりれとてよとてよとてよとて

かげよとていひてとやうに人々のあま  
よきとあげよとていひてとやうに人々のあま  
きをたらしめよとていひてとやうに人々のあま  
馳す所なりとていひてとやうに人々のあま  
とていひてとやうに人々のあま  
本の及れをくみ 大工番匠の教有り周禮乃  
考工記よりありてはとていひてとやうに人々のあま  
石金玉とていひてとやうに人々のあま  
石代の及れ 考古圖博古圖をていひてとやうに人々のあま  
其の及れをくみ 考工記の教有り周禮乃  
及れをくみ 考工記の教有り周禮乃  
及れをくみ 考工記の教有り周禮乃  
及れをくみ 考工記の教有り周禮乃

あへの制法よありてはとていひてとやうに人々のあま  
及の洞 文章或はは来消息とていひてとやうに人々のあま  
及木 及板ともあり物とていひてとやうに人々のあま  
及紙とていひてとやうに人々のあま  
堆とていひてとやうに人々のあま  
和名十三云 荷春秋云 沈麟士少清貧以反故  
寫書数千卷  
たぐひよとていひてとやうに人々のあま  
及板人教とていひてとやうに人々のあま  
時大とていひてとやうに人々のあま  
最勝講 一条侯長保四年五月七日よ始て  
おこつる吉日を撰ておこす日あり清涼殿とて



にむろのくくが末の世ふらひどるは九方(九方)は神(神)ふ  
多(多)るは神(神)こそ世(世)はうきめ(め)さる(る)に地(地)はうき(き)露(露)基(基)  
物(物)釣(釣)何(何)後(後)何(何)つ(つ)な(な)ふ(ふ)み(み)ど(ど)も(も)ま(ま)あ(あ)り(り)あ(あ)や  
志(志)の(の)ほ(ほ)も(も)あ(あ)り(り)あ(あ)つ(つ)き(き)小(小)部(部)小(小)板(板)友(友)言(言)せ(せ)た(た)を(を)ど(ど)  
も(も)め(め)で(で)た(た)く(く)し(し)き(き)こ(こ)ゆ(ゆ)き(き)疎(疎)く(く)軟(軟)乃(乃)殺(殺)せ(せ)り(り)ふ(ふ)  
こ(こ)そ(そ)い(い)ど(ど)く(く)れ(れ)袂(袂)友(友)の(の)ど(ど)い(い)り(り)と(と)う(う)よ(よ)  
ね(ね)ど(ど)り(り)ふ(ふ)め(め)で(で)た(た)り(り)と(と)な(な)れ(れ)疎(疎)く(く)事(事)お(お)れ(れ)る(る)  
さ(さ)ゆ(ゆ)い(い)を(を)り(り)法(法)目(目)お(お)下(下)人(人)も(も)の(の)ち(ち)り(り)る(る)に(に)か  
れ(れ)る(る)は(は)お(お)り(り)し(し)ら(ら)り(り)を(を)ま(ま)た(た)も(も)さ(さ)る(る)あ(あ)り(り)こ(こ)  
う(う)に(に)睡(睡)床(床)る(る)ら(ら)り(り)を(を)か(か)り(り)と(と)き(き)内(内)侍(侍)お(お)れ(れ)り(り)と(と)  
と(と)ふ(ふ)め(め)で(で)て(て)く(く)優(優)れ(れ)る(る)お(お)物(物)也(也)と(と)き(き)性(性)た(た)る(る)た(た)ぬ(ぬ)は(は)  
お(お)も(も)ち(ち)り(り)る(る)

九方 都の内と云一糸より九糸まであり  
長恨新に九糸城(城)闘(闘)る(る)あり  
よ(よ)ち(ち)り(り)ず(ず) 世(世)は(は)う(う)き(き)め(め)さ(さ)る(る)に(に)地(地)也(也)  
露(露)基(基) 内(内)裏(裏)の(の)方(方)は(は)あ(あ)り(り)る(る)也(也)  
物(物)釣(釣) 法(法)深(深)友(友)の(の)内(内)の(の)南(南)あり(り)物(物)釣(釣)間(間)二(二)百(百)あり(り)  
う(う)に(に)て(て)物(物)夕(夕)侍(侍)と(と)なり(り)南(南)より(り)平(平)友(友)二(二)枚(枚)糸(糸)も(も)  
船(船)の(の)厚(厚)風(風)と(と)ま(ま)り(り)方(方)より(り)副(副)障(障)子(子)あり(り)水(水)  
厚(厚)風(風)の(の)内(内)の(の)調(調)度(度)と(と)置(置)り(り)禁(禁)秘(秘)抄(抄)河(河)  
海(海)の(の)内(内)の(の)洋(洋)也(也)  
何(何)後(後)何(何)門(門) 一(一)本(本)に(に)な(な)る(る)は(は)あ(あ)り(り)る(る)也(也)  
内(内)裏(裏)の(の)厚(厚)門(門)敷(敷)あり(り)る(る)は(は)一(一)と(と)に(に)其(其)名(名)を(を)い(い)ふ(ふ)  
あり(り)る(る)に(に)禁(禁)秘(秘)抄(抄)拾(拾)芥(芥)抄(抄)より(り)る(る)あり(り)

小板コイタ 名目ミヤウモリヒナ 神シメ 仙シメ の中ナカ と云々トクク あり

方カタ を戸ド 今イマ の清涼殿セイリョウテン 此ココ 神カミ の廊下ナリカ たるにあり

疎ス 小次コジ たるまうけせよ 殿テン の灯トウ なる紙目シメ 意イ たる

り也ナリ 又マタ まうせよマウセ 六ム 灯トウ もモ うウ ぶフ うウ す

かカ いイ りリ 一ヒト 火ヒ とト 云々トクク あり

と云事也トクク 疎ス たるタル 六ム のノ まうけマウケ と云トクク あり

てテ 八ヤチ 火ヒ のノ まうけマウケ と云トクク あり

禁秘抄キンヒシヨウ 云イハレ 夜御殿ヨミド 四方シヨウ 有妻戸ツメト 南大妻戸ミナミオホツメト 一間也イツカンナリ

帳チヤウ 曰イハレ 清涼殿セイリョウテン 東枕トウマク 墨御座敷也スミミヤゼキナリ 御枕ミマク 有アリ 二階ニカイ 奉

安御ヤスミ 劍ケン 神カミ 室シム 皆有アリ 覆フキ 蕙ヱ 芳ホウ 也ナリ 御劍ミケン 東南帳トウナンチヤウ 四角

有燈檠トウロ 又帳マタチヤウ 南西ミナミニシ 敷シ 置ツキ 為ナリ 女房座メヤウザ

河海カウカイ 云イハレ 夜御殿ヨミド のノ 帳チヤウ のノ 四角シカク 一ヒト 灯トウ 檠ロ あり

燈トウ 之シ 夜ヨ 御殿ミド 大オホ 燈トウ ときトキ 是コト 八ヤチ 室シム 劍ケン 神カミ 室シム 此

ありナリ あり

上ウヘ 卿ケイ 乃ノ 侍サマ 也ナリ 上ウヘ 乃ノ 侍サマ 也ナリ 上ウヘ 乃ノ 侍サマ 也ナリ

心ココロ 侍サマ 也ナリ 心ココロ 侍サマ 也ナリ 心ココロ 侍サマ 也ナリ

内ウチ 辨ハジメ 也ナリ 内ウチ 辨ハジメ 也ナリ 内ウチ 辨ハジメ 也ナリ

祿ロク 司シ 乃ノ 也ナリ 祿ロク 司シ 乃ノ 也ナリ 祿ロク 司シ 乃ノ 也ナリ

人ヒト 之シ 云イハレ あり

徳大寺の世系

閑院春宮大夫  
公實

實行 六条太政大臣  
三條流号轉法輪  
通季 大納言  
西園寺流

實能 徳大寺九大臣  
徳大寺流

公能 大炊御門大臣

實定

後徳大寺九大臣

公継

野宮九大臣

實基

徳大寺太政大臣

公孝

後徳大寺太政大臣

以後禁裏に居る末乃末も同かゝるに云々  
初は仕官に依りてよく兄弟あり也色部  
人の來て是れ其地と云て是れ天子あり  
而也と云ふは及はるるに云々

百官の官をえりてよく廣く王建が常詞をた  
まりもよくそ初ての事也いよきことと云  
くまはれありんがされよくありのいかに  
い痛く思ふなりは杜牧が何處を賦  
と云らぬぞと云はゆきと趙高李斯がよきこ  
と云らるるに云はるるに云はるるに云はるる

補王乃即ちおたりますと云ふは  
向くは好むなりと云ふも  
てたりと云ふは好むなりと云ふも  
社をたててよくなりと云ふも



備り給ふと云々終る程ありひきとじつとト定之云  
てて耐院へ入給ふんとて此後を明年野あへ  
入給ふんとて終あり又明年伊勢へとて入り給  
ふんとて終あり二年此八月より翌年八月  
まで終ありと云々耐院言給後之事定  
式より祥也む鳥云伊勢耐院の終あり八媛  
娥のありと云々河より賀茂此後流の野あり  
系野あり

續日本紀世二云宝龜三年十一月以酒人内親王為伊  
勢耐院居春日耐宮 三代實録才三貞觀元年十  
二月廿五日丙午伊勢耐院子内親王於鴨水邊六  
條坊門末修禊賀茂耐儀子内親王於同水邊待

賢門末修禊並入初耐院  
曰才四云貞觀二年八月二十五日伊勢耐院  
子内親王臨鴨水大修禊事良日入野宮  
延喜式才五 耐宮 凡天皇即位有定伊勢本  
神宮耐王弟内親王末嫁者卜定若名内親王  
者依世次簡諸王女卜之

やけくたりと云々事此 源氏實本をよ  
野あけ事とありと詞云物と云々をさる小  
あけをたぬと云々はそいふやとあうあり  
いかりそめやと云々本あけと云々はそいふ  
かきくまきと云々いふと云々はそいふ



此河とに鎮坐し流るる河と清瀬河とあり  
大和郡の常とありひりぬる河とありあす終り  
うらりて中終りも中今終り高きなり  
雄略天皇廿二年此河に宮あり丹波の宮あり  
豊受を神としりて伊勢の宮あり山田の宮あり  
勅語を今終り外宮とし也是を妻を神ハ國常之尊也  
け付事とて大和郡あり此河とありて終りて終り

日本紀并神皇正統記より  
賀茂 雷神也下賀茂ハ御祖神也紀宮也  
上賀茂ハ別雷神也青賀茂健甬身余れい  
玉依姫河色に遊み河丹津夫流末流取てうら  
家の擔めとて一人の男とあり其父とありん

より小盃を男ありてて汝う又よ與ふと  
云付かの夫れ前より置け夫とす鴨の羽をれハ  
そ姓と賀茂氏とあり也は付男子我ハ大津  
れ子ありとて飛て去る乃あり雷神也  
今の上賀茂なり玉依姫も同付と云ふより  
槻樹のりになりて神とあり是今の鴨也  
丹塗夫も又神とあり今終り松尾大の神也神  
乃終り家とて大也貴の变化ありと也  
又古事記云大國主神娶坐曾形奥津宮神多紀理  
毘賣命生子河遲鉏高日子根神此河遲鉏高日子  
神者今謂迦毛大御神者也迦毛者賀茂也  
又日本紀より雷ハ大神勅遇突智此不変也とあり

春日 春日四座大神者一殿武雷命二殿  
斎主命三殿天津見屋根命四殿  
神護景雲二年大和國三笠山下四神  
跡と云れ於大和國大和郡大和郡  
本紀皇孫天孫於武雷命斎主命  
と云れ於大和國大和郡大和郡  
根命皇孫と云れ於大和國大和郡  
於大和國大和郡大和郡  
と云れ於大和國大和郡大和郡  
神と云れ於大和國大和郡大和郡  
平野 山城國葛野郡あり延喜式平野  
神四座今本神久度神古閑神相殿比賣神と

あり公夏根源と云れ於大和國大和郡  
高階氏才四大江氏才大和國大和郡  
年中よけ社と云れ於大和國大和郡  
住吉 日本紀伊傳尊日向橋の檜原と云れ  
於大和國大和郡大和郡  
表筒男命と云れ於大和國大和郡  
攻次りけけ社あり於大和國大和郡  
はいよ之韓と云れ於大和國大和郡  
と云れ於大和國大和郡大和郡  
弟那珂郡と云れ於大和國大和郡  
中筒表筒と云れ於大和國大和郡



分り也軒遇実智所爰より高麗を戸津は是なり  
一しきも王城乃手後神はてはり

吉田 世社春日明神を勧請する也貞觀年中

友尔山麓郡建立を一院院永延元年初て奉

幣使とて三冬良於帝より春日長岡帝より

大原野平女城とては社皆帝廟よりりり

りりて室社と守終ふ也堂園白乃法成寺と

たてて神吉田とあらがの興福寺春日社を擬と

又神樂園より霹靂神の祭事あり事は延

喜式書一に載し

大京野 竹山と小塩と也文法を今時作と

は祭と行りるま白と同体也春日の社をさる

辰死夫人系續の事ありあり

松尾 大寶元年秦都理よりりては社と云

つ日者之病當社宿同体乃社也延喜式九神

名帳山城國葛野郡松尾神社ニ座あり

梅宮 山城國よりり橋氏祖神也嵯峨天皇乃

后嘉智子ハ贈大政大臣橋清友のむとあり也法友ハ

結兄分孫帝は丸も子也嘉智子ハ仁明天皇乃母也

兼和年中に初ては社と祭は橋是定これと

管領とて也は嘉智子檀林寺と云終ふよりりて

檀林寺は所も也今も天龍寺を同師也后の遺

跡よりり也其尻と西郊より捨りりる敷りり地





又古今序よりわたり川のせまをりうらみもあはれ

けうつり 春序なきもひけうつり事をなほのこ

くねひゆさかやもはうさけりあふとや

陳鴻長恨歌傳時移事去樂尽悲來

野鳥也萬葉に草のまどろくもけりま

野等ともまろく 里まのれて人のありしはな

まや庭に雛は秋のねろりり

桃李ののいふは 史記李廣傳賛桃李不言

下自成蹊 菅三呂詩桃李不言春統碧烟霞

吾跡昔誰柳

京極殿 拾芥中末云京極殿土門南京極西

南北二町其南一町被入道長家或大入道殿

家上東門沅是也 後一條後朱雀後冷泉三

代帝於此所誕生匡衡宅 皇后四人於此所

誕生於家紀伊嶋 賀茂明神通給後一

條後冷泉被加南一町

法成寺 一條河原あり後一條院あり

白賴公をみゆさく 京極殿より宇治

志よりゆり事変り 昔は人のなせとせ

とく志いよりゆり事極いりりあり

唐園多くをくも 道長公は病中小法あり

唐園のゆく事附せりけりる 京極殿あり

我思うるも 我は勇傑也

我思うるも 我は勇傑也



或抄云延久三年正月十八日大極殿額可狹誰人  
書乎公卿會談之時兼行朝臣應撰已書大内殿  
舎額今度尤可書之由右大臣師房公被計申之

かどうりは名所がふなま 法成寺などのもく名を  
不之ぬ此況やま介は旧法いりく船人なり也  
此は叙力たある時よ子葉孫枝の程あげうせきと  
以常て思ふも祇好くうつりうり事回慕れ  
石と拾ふうきし 浴湯が旧宅に古槐冷志うき  
金谷園乃たハ風ぬありし 暎と作し  
二世と世より一石せよのうらぶ 暎と作し  
大之月の紅をうきすやまれハ驪山とらゆりの  
漢文陵と稱せりうきし 暎と作し

窮りぞしと此法を法を命とせ道長公佛法を  
あつてほまその福といりて寺と云れし  
寺と云れしと云れしと云れしと云れしと云れし

風も吹あけはらうりふ人の心は花よおれり年  
月をあつてあられしと云れしと云れしと云れし  
ぬ物と我世の介と成ゆと云れしと云れしと云れし  
のつらきと云れしと云れしと云れしと云れしと云れし  
白さくとのまんと云れしと云れしと云れしと云れし  
まうまん事と云れしと云れしと云れしと云れしと云れし  
院の百と云れしと云れしと云れしと云れしと云れし

よかりはのれまゝのころスミレのうゝとさびも又字  
あつさうゆ事一ゆりらん

うぢも明あつぞうつふ人の心乃たよ 古今よ  
貫きなり 桐花もさぬもねほも人ほん

う風も吹あつぬ 山所秋をみそつらあ  
りのハ世中お人乃人の花ようありあね

わが世の介よ成ゆく 世よ乃人のあつゆり  
らりるりりりまゝいさね人の別よりもねく

えんねくさり  
白き糸乃をゆん事とれく 高辨上人

あつさ糸と人れんよきとくさ事とあね  
ひりくれんよとあつさいさあうむさハをゆ

ねま小そくめん 風雅集

淮南子曰揚子見達路而哭之為其可以南テ可以北ニ  
墨子見練絲而泣之為其可以黃ニ可以黑ニ高誘注

曰惘其本同而末異  
塘川院百首 多なは百首あり初なはるそを

於大納言敷尔公實勸進キンササキ之あふひく首る  
のくハ別と実心の秋なり 董の題なり

或説よはなはる首ハ永久四年の冬なりとあ  
樹頭樹底く残紅片々東西零乱上下其子未結

薄倖哉ハシ立更風無頼哉ナセキチ封家姨フウイ不亦錯恨アヤシク乎花ハナ毫  
比色衰也ヒス風狂カウ比入心也ヒス冥恨メイ我衰何恨ワカ念ネン忽

変哉ヒナ右行巫峽ウカ元在人心モト宣他求乎ノミヤ玄都ヘン于樹

妖艶春風采亦采矣一旦唯足免矣燕麥而  
已矣鳥衣國之鳥入王謝堂未幾必在尋常  
百姓家丈夫惟人之道世失所依乎不得於君  
乎故曰遯世而無悶是常人之所不及也  
今讀詩後未免於惘而悲吁千樹之桃五更  
之風可并按焉

中國のつりは節令おこるれは  
叙重内侍所  
のつりま坊跡ひてのまよふまをねらりしや  
然りこのまののみやうこをねらりてりしねむる

花をりりし今世のまをねらりし  
琉球をりし人ともなほまをねらりし  
わりのまを人のまをねらりし

以國ゆつり 天子は位をまをねらりし  
時の節令也 讓國ともは讓位とも申也  
叙重内侍所 是を三神神也  
叙ハ寶劍とも天叢雲神とも素戔嗚尊出  
雲の國より八岐蛇を切つ小戸大蛇の尾中  
よまをねらりし天照大神小戸より人  
及て伊勢大神よまをねらりし日本武尊東征  
此時乞と申す帯をねらりし駿河國よ賊徒  
火を放て尊とねらりし時言はぬとねらり

あふひらひひれ天桐賦は吹かりて逃  
たぬ先より系籠釵も中は長き十握あり  
十握釵も中は長き十握あり  
何藪雲たのひひれ天のひくもは剣とも  
中すは代は中資物あり

爾ま神皇あり天照大神天は石窟あり  
ひひれ法津のりりて天の香久山の坂樹  
の上枝小くけり八坂瓊之御統也又八坂  
瓊曲玉より天照大神素盞鳥よりひひ  
ひひれ中資物ありひひれ中資物あり又ハ  
素盞鳥尊は玉を羽明玉と云神よりうきを  
は天照大神よりひひれ中資物也

内侍不 貫不も神後事也八咫鏡も真  
経津鏡もも也是も天照大神岩戸小籠り  
ひひれ天の香久山の坂樹中枝よりけり  
ひひれ法津のりりて天の香久山の坂樹  
中枝よりけり天の香久山の坂樹中枝より  
けり天の香久山の坂樹中枝よりけり  
内侍不も貫不も神後事也  
天照大神天照大神賜皇孫天津彦火瓊瓊杵尊  
八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物あり又  
大神の勅一殿を月して安玉すべしありあり  
よるよる上は八咫鏡より

別殿よまみおひ新よ改修して沖代もはかみ  
し授けしして伊勢よりつらき給ゆ也 貫所の手  
ましく禁秘鈔にあり

新疏

ありおきせしひ 此位をありおきふあり  
そのりとのともおきよはこ 主殿寮乃下月とこ禁  
中の掃除をありあり  
おもものやよはこ ともハ伴氏のもの白殿寮乃ト  
部とかり也みやづこハ法奴の字あり  
は後讓國の阿内侍不叙をわらさ給ふも  
は成王の崩しお阿赤乃大削弘壁戈ら  
頼とほり給く康王の位も所し事あり

侍り末殿よこのありおきれういゆり人もおき  
どしおきとまれの廣乃玄宗の心ありは  
位を讓て蜀より還りては南内小す  
おもつけありされハ樂天も西宮南苑多秋草  
宮葉満階紅不掃といひゆして李輔國  
政とゆりて二帝と弁毫をり

涼間乃年むり哀をり事ありし 侍所を  
さゆをど板敷とませありのの蓋とありて布  
もろりありし 沖調度とありて病を  
のりうそくお乃年結まてとあり

諒闇 書說命上曰王宅憂亮陰三祀 蔡氏傳云  
亮亦作諒陰古作闇按喪服四制高宗諒陰三年  
鄭氏註云諒古作梁楣謂之梁闇讀如鶉鷓之鷓  
闇謂廬也即倚庐之廬儀禮剪屏柱楣鄭氏謂柱  
楣所謂梁闇是也宅憂亮陰言宅憂於梁闇也先  
儒以亮陰為信默不言則於諒陰三年不言為語  
復而不可解矣

朱子語類問諒陰以他經考之皆以諒陰為信默惟  
鄭氏獨以為廬天子居廬廬合禮制朱子曰所  
引剪屏柱楣是兩事柱音知主及似是從手不從木  
也蓋始者戶北向用草為屏不剪其餘至是改而西  
向乃剪其餘草始者無柱与楣答著於地至是乃施  
短柱及楣以柱其楣架起其答令稍高而下可作戶  
也梁闇未詳在定制如何不敢輒為之說祖假使不  
如鄭說亦未見天子不可居廬之法 又問諒陰之  
義朱子曰孔氏曰諒信也陰默也刑氏釋之曰信謂  
信任冢宰胡氏秋之曰信然默而不言也二家皆用  
孔訓而為說不同鄭氏於礼記又讀作諒闇言居  
倚庐大抵在者天子居喪之名

梁闇之義少者周之序考也 其制法也  
其朱子之說也 其制法也

類知思ひ初物諸集<sup>シツチウ</sup>種々を<sup>ツクシテ</sup>詳小<sup>ツクシテ</sup>終  
ソトモ蔡氏<sup>サイシ</sup>に口授<sup>クシユ</sup>する時<sup>トキ</sup>の倚<sup>ヨリ</sup>座<sup>ザ</sup>は<sup>ハ</sup>養<sup>ヤウ</sup>と<sup>ト</sup>言<sup>コト</sup>ふ  
見<sup>ミ</sup>ゆりて蔡氏<sup>サイシ</sup>が書<sup>カキ</sup>傳<sup>デン</sup>ふ鄭<sup>テイ</sup>玄<sup>ゲン</sup>が説<sup>セツ</sup>と<sup>ト</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>也  
内<sup>ウチ</sup>よりより<sup>ヨリヨリ</sup>と<sup>ト</sup>言<sup>コト</sup>ふ<sup>コト</sup>は<sup>ハ</sup>三年<sup>サンネン</sup>物<sup>モノ</sup>とい<sup>イ</sup>ふ  
とありよ詞<sup>チ</sup>重<sup>ジュウ</sup>複<sup>フク</sup>なるゆ<sup>ユ</sup>なり  
あ<sup>ア</sup>は<sup>ハ</sup>す<sup>ス</sup> 塩<sup>シホ</sup>囊<sup>ナウ</sup>抄<sup>セウ</sup>云<sup>ク</sup>倚<sup>ヨリ</sup>座<sup>ザ</sup>は<sup>ハ</sup>板<sup>イタ</sup>敷<sup>シキ</sup>と<sup>ト</sup>言<sup>コト</sup>ふ  
葦<sup>アシ</sup>乃<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>簾<sup>レン</sup>布<sup>フ</sup>木<sup>キ</sup>凡<sup>ニ</sup>太<sup>タイ</sup>刀<sup>トウ</sup>平<sup>ヘイ</sup>結<sup>ケツ</sup>其<sup>キ</sup>外<sup>ガイ</sup>特<sup>トク</sup>末<sup>マツ</sup>等<sup>トウ</sup>これ  
非<sup>ヒ</sup>常<sup>ジョウ</sup>あり 一<sup>イチ</sup>説<sup>セツ</sup>より<sup>ヨリ</sup>此<sup>コノ</sup>を<sup>ヲ</sup>翠<sup>スイ</sup>簾<sup>レン</sup>と<sup>ト</sup>書<sup>カキ</sup>ぬ<sup>ノ</sup>も<sup>モ</sup>か<sup>カ</sup>う  
と<sup>ト</sup>布<sup>フ</sup>帽<sup>ボウ</sup>類<sup>レイ</sup>と<sup>ト</sup>あり<sup>アリ</sup>木<sup>キ</sup>凡<sup>ニ</sup>は<sup>ハ</sup>け<sup>ケ</sup>也<sup>ヤ</sup>り<sup>リ</sup>う<sup>ウ</sup>と<sup>ト</sup>よ  
り<sup>リ</sup>あ<sup>ア</sup>説<sup>セツ</sup>なり  
太<sup>タイ</sup>刀<sup>トウ</sup> 黒<sup>クロ</sup>作<sup>サク</sup>と<sup>ト</sup>銀<sup>ギン</sup>の<sup>ノ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>物<sup>モノ</sup>あり  
平<sup>ヘイ</sup>結<sup>ケツ</sup> あ<sup>ア</sup>れ<sup>レ</sup>も<sup>モ</sup>思<sup>シ</sup>深<sup>シ</sup>あり

ゆーきーこはていあ〜るはあり

初<sup>ハツ</sup>め<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>よう<sup>ユウ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
きん<sup>キン</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>き<sup>キ</sup>人<sup>ニ</sup>を<sup>ヲ</sup>つ<sup>ツ</sup>ま<sup>マ</sup>う<sup>ウ</sup>て<sup>テ</sup>な<sup>ナ</sup>あ<sup>ア</sup>が<sup>ガ</sup>れ<sup>レ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>よ  
何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヨ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
及<sup>キ</sup>た<sup>タ</sup>ら<sup>ラ</sup>し<sup>シ</sup>や<sup>ヤ</sup>り<sup>リ</sup>す<sup>ス</sup>つ<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>の<sup>ノ</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>は<sup>ハ</sup>  
う<sup>ウ</sup>き<sup>キ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
け<sup>ケ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
つ<sup>ツ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヨ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
れ<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヨ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

まぎにけいりる 枕葉子にさしつゝいふ  
しき物われらあひむいふあそびのいふ  
又折れり衣をりし人の文はさしつゝなる  
日けりけいりる

人志づまりてのち 人けしむるまらりる也  
後漢書列傳五末歛書云臣夜人定後とあり

其さしむもさしむの御也さしむむの御也  
貝足ツツ よろののたるとあり

かき人の手ありい 涼氏ヒヤノ 幻をまたらる御  
りてかきるなりい人のふも物のはわでい出  
流しつぎそやせぬんともいふの御の  
法はよりさしむせぬいなりとも中ははは

ちりいよはゆい今さしつゝあつりるさし  
ははる事あれが久しうぬまはりいしこ  
おるそいさむの御れやうなりさみつささ  
おとせのさみりけりりり成る成る  
さしあむさしあむさしあむさしあむ  
二人のりりねんまやせぬいさしぬね  
事ささささ人のあさみりりりりり  
まして 物モノ 拾シイ 江エ 河カ 舟フネ 舟フネ 舟フネ 舟フネ  
れ文をさしあをりて御りさしつゝさしあ  
るさしつゝさしつゝさしつゝさしつゝ

又選五十六清安シヨウアン 仁が書り 楊仲武ヤウチュウブ 誅シツ 云 披ヒ 秩シツ

教書屢親送又有造有寫或草或真執抗周漢  
 忠見其人紙勞于手涕霑于巾  
 白樂工感回待者詩和深吟竅一七吁々淚乾  
 お湿白髮二十年お回待者十人砂和九人  
 せ

人の心をあつくり悲しみのなす中陰のやど  
 山里花ぞうつろひて便あつてをばあはあまの  
 方をほれとささむいくなみあつらんあつらん  
 ねをなぐるはるはる物も似ねたるの日にや  
 あう<sup>あう</sup>生<sup>か</sup>のりも事もね<sup>ね</sup>状<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>

うめちりくよはりあつれなまのせまかようて  
 ぞふよふねとよ事いさむらさきあつらん  
 あがうこ愁のさめいむ形事ぞねとつらん  
 かむりたあつらん何らん人の心をなぬうそを  
 中き年月つても病つらんよまあつらん  
 若い日よ<sup>若</sup>跡<sup>あと</sup>とつらんあつらん  
 きらごらりいさむねやよ<sup>ね</sup>ね<sup>ね</sup>とつらん  
 うめちりくよはりあつれなまのせまかようて  
 おさめてちりくよはりあつれなまのせまかようて  
 花なく<sup>花</sup>卒<sup>そつ</sup>於<sup>お</sup>海<sup>うみ</sup>も若<sup>わか</sup>む<sup>む</sup>木<sup>き</sup>葉<sup>は</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>らん  
 て夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>嵐<sup>あらし</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>光<sup>ひかり</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>らん  
 むい<sup>むい</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>らん<sup>らん</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>らん<sup>らん</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>らん<sup>らん</sup>

いづるくう分て字たさふるばり此末くハ衣  
まじやあひふさあはさふわさしたんぬま  
らねの今と名をたにまらば年々此まのまれ  
うぞんあらん人ありれらるるべきとてハ  
嵐よむじびり松もあをなまもそぢよらえ  
古墳いあられて田と成ぬそのさくたよねく成ぬ  
るぞかお

中陰 人死して未来生は中間より先ハ陰  
此よりりて得りぬる中陰と名づく五陰ハ  
色受想行識をかり或ハ一七日乃至七日  
此る仏事と修むる也随願淨土經并無量壽  
經ありんるりり 大藏一覽卷一尊者設

摩達多曰中有極多住七々四十九日定結生故  
尊者世友曰中有極多住經七日不久往故問曰  
若七日内生縁和合彼可結生若爾所時生縁未  
合彼豈斷壞答曰彼不斷壞謂彼中有乃至生縁  
味和合位数死教生無斷壞故云  
んあハききき 深氏ハ君ハ必念誦を修ひて  
おぞめらうまにんあハたじ 河海ハんそ  
ぐらうき成也 周章 擾  
ものあはぬ 物ハ多らんるもあはと云也  
はそ乃日 甲十九日あり  
約ありぬ 分静くちあうらと後り愛めん  
ハ別くはなりて 退教より義あり



曰去者謂死也來者謂生や不見容貌故跡也  
歡愛終日故親也

いふことと 上は年月ごとくわかれぬことあり

よその物也わかれぬことありきりつりいふはぬ

みやむいさしきりつりいふはぬことあり

もろぞとさうり まるびつりいふはぬことあり

わくハ 死骸也 深氏相堂いむれもいふことあり

けうとん 河海に糸跡とちりおそりもいふことあり

卒那波 翻譯名義集才七卒堵波西域記云浮

固又曰偷婆又曰私偷歎皆礼也此翻方墳亦翻

固塚亦翻方駘義翻雲房列點釈名云房者見也

先祖形見所在や又梵名於海發軔云説文元

世字徐鉉新加云西國浮圖也言浮圖者此翻聚

相戒壇固經云原夫塔字此方字唇乃是物声本

非西土も号着依梵本瘞狩佛骨所名曰塔婆

よすがり ありと也

ろも又いふことあり うれし又也さかあふん

ねねくもせそほい少ゆふゆ也

いづれの人とふとさうりて 白氏文集古墓

何代人不知姓與名化為路傍土年々春草生

まろくまにさく まろくまにさくまろくまにさく

まろくまにさく まろくまにさく

まろくまにさく まろくまにさく

まろくまにさく まろくまにさく

まろくまにさく まろくまにさく



いふ物ありしれ也よは紙とて去はひぬきこは紙と  
て油の優チヂなるるそののたはれなりありし見  
せしころよ書きたるをすこしとてあましくなる  
しやまもやどとてしむるもあつてもくらた  
し油し油し油しとる人ありしころぞうあつん  
ふしはましきく約りたころはひよもろく  
その人ありぬくうせもなりしとみゆり

あまのこをせと 葉月ハツキとあり也

たこし油のゆりに 事振は優チヂ也

枕草紙をたはらしきものなり物いされんせある  
人の九月にわたりしきとあつめりしころうきうみ  
りてありしころよあまのこをせとみゆり

はくしといづのよしきしむくしきしきしき  
わぐえもいしきしきしきしきしきしきしき  
とらゆりしきしきしきしきしきしきしきしき  
いきしきしきしきしきしきしきしきしきしき  
みまのれ月のありしころよあまのこをせと  
りしころよあまのこをせとみゆりしきしき  
はかりしきしきしきしきしきしきしきしきしき  
月の光のしきしきしきしきしきしきしきしき  
とらゆりしきしきしきしきしきしきしきしき

今乃内書<sup>ナリ</sup>作<sup>シ</sup>りしとせられて<sup>テ</sup>も<sup>ハ</sup>滅<sup>ス</sup>れ人々<sup>ハ</sup>いふを<sup>シ</sup>れぬ<sup>ル</sup>も  
ソ<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>那<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>遷<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>此<sup>レ</sup>日<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>く<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>也  
玄<sup>ノ</sup>禪<sup>ノ</sup>門<sup>ハ</sup>此<sup>レ</sup>院<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>宗<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>殿<sup>ノ</sup>の<sup>ク</sup>ら<sup>ハ</sup>く<sup>ニ</sup>の<sup>穴</sup>半<sup>ニ</sup>終<sup>ル</sup>く  
あ<sup>ち</sup>も<sup>ハ</sup>そ<sup>レ</sup>く<sup>ニ</sup>て<sup>ハ</sup>そ<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ニ</sup>修<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>子<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>り  
り<sup>り</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ふ</sup>る<sup>ニ</sup>れ<sup>入</sup>て<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>さ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>し</sup>  
あ<sup>や</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>ハ</sup>そ<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>れ<sup>ば</sup>な<sup>ら</sup>り

遷<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>ハ 新<sup>ノ</sup>殿<sup>ニ</sup>移<sup>リ</sup>移<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>

玄<sup>ノ</sup>禪<sup>ノ</sup>つ<sup>院</sup> 伏<sup>見</sup>院<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup> 洞<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>階<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup> 伏<sup>見</sup>院<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup> 洞<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>階<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>

閑<sup>ノ</sup>院 拾<sup>芥</sup>中<sup>ノ</sup>末<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup> 閑<sup>ノ</sup>院<sup>ニ</sup>二<sup>條</sup>南<sup>西</sup>洞<sup>院</sup>西<sup>一</sup>町

冬<sup>ノ</sup>嗣<sup>ノ</sup>大<sup>臣</sup>家<sup>ノ</sup>金<sup>岡</sup>壘<sup>水</sup>石<sup>公</sup>季<sup>公</sup>傳<sup>領</sup>之<sup>ト</sup>

え<sup>う</sup>れ<sup>入</sup>て 葉<sup>ノ</sup>の<sup>字</sup>を<sup>り</sup>て 入<sup>系</sup>れ<sup>松</sup>千<sup>葉</sup>

乃<sup>ハ</sup>花<sup>カ</sup>ぞ<sup>り</sup>り<sup>り</sup>字<sup>ヲ</sup>名<sup>ヲ</sup>を<sup>る</sup>也

甲<sup>ノ</sup>香<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>る<sup>ノ</sup>貝<sup>ノ</sup>の<sup>や</sup>う<sup>カ</sup>お<sup>ら</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>て</sup>口<sup>ノ</sup>の<sup>味</sup>の<sup>あ</sup>り<sup>そ</sup>  
お<sup>ら</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>て</sup>い<sup>そ</sup>る<sup>ノ</sup>貝<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>武<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>沃<sup>ノ</sup>の<sup>浦</sup>  
と<sup>ハ</sup>石<sup>ノ</sup>の<sup>若</sup>い<sup>貝</sup>れ<sup>り</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>り</sup>

甲<sup>ノ</sup>香<sup>ハ</sup> 本<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>圖<sup>ノ</sup>經<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>甲<sup>ノ</sup>香<sup>ハ</sup>今<sup>ノ</sup>醫<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>稀<sup>ニ</sup>用<sup>ル</sup>但<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>香

家<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>須<sup>ル</sup>又<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>大<sup>小</sup>用<sup>ル</sup>小<sup>者</sup>佳<sup>也</sup>可<sup>ク</sup>聚<sup>ル</sup>香<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>散<sup>ル</sup>也

和<sup>名</sup>集<sup>曰</sup>果<sup>物</sup>志<sup>曰</sup>甲<sup>ノ</sup>香<sup>ハ</sup> 俗<sup>云</sup>螺<sup>ノ</sup>属<sup>也</sup>可<sup>ク</sup>合<sup>シ</sup>象<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>燒<sup>上</sup>

之<sup>ハ</sup>皆<sup>シ</sup>使<sup>ハ</sup>益<sup>ヲ</sup>芳<sup>ク</sup>独<sup>ニ</sup>燒<sup>ル</sup>則<sup>チ</sup>臭<sup>ク</sup>

を<sup>ら</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>て</sup>一<sup>本</sup>よ<sup>り</sup>を<sup>ら</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>て</sup>い<sup>そ</sup>る<sup>ノ</sup>貝<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>  
つ<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>今<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>澤<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>を<sup>ら</sup>ち<sup>い</sup>く<sup>て</sup>い<sup>そ</sup>る<sup>ノ</sup>貝<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>



あつていふまじい事なれども御座りし人ぞいれと  
 人のいふ事なまぢい事也  
 ちがひごと  
 仕下やりのひより 仕下りてははるまじい事  
 うつろひの事こと人一人やまじい事  
 ねに坊にあり

笠櫃上之三者於砥用郷 自十月十九日至同廿一日写之

中村直道

物々へとてなぐるれり人のまあはけれよんを  
 さにほくろくするはる申りこそとてあはれ  
 れどいふ人こそなれどなれどもくあつて  
 人こそあつていふ人こそあつていふ人こそ  
 あつていふ人こそあつていふ人こそ

は辰男ホウノヲ女メ朋友トモはる辰ツチなり  
 交ひし事なれどもあつていふ人こそ  
 こと礼樂の事なれどもあつていふ人こそ  
 交ひし事なれどもあつていふ人こそ  
 うらりともあつていふ人こそあつていふ人こそ  
 あつていふ人こそあつていふ人こそ





藏金於山抵壁於谷注云抵側擊也

うづもれぬ名白氏文集遺文三十軸軸々金玉

聲龍門泉上土埋骨不埋名

おろろはくはる人又祖の瘞よりして不肖

此子孫も官位よのわはくあり者も官位あぶよ

賢才を用ふは世に家にありまると例とをを

世官とまよふ政よりは又愚をれも時よの

揚國忠が愚一と國柄と弄く

賢人聖人みづくや位よとり

孟子萬章下篇為貪者辞尊居卑辞富居貧辞尊

居卑辞富居貧思乎宜乎抱関撃析孔子棠為委

吏矣為乘田矣

人のやをよろう論語顔淵篇云夫聞也者色

取仁而行違居之不疑在邦必聞在家必聞

莊子逍遙遊云奉世而譽之而不加勸奉世而非之而

不加沮定乎内外之分辨乎榮辱之境

卷ハ又韓退之送李原序

與其譽於前孰若無毀於其後與其樂於身孰若無

憂於其心

力此ほの名通鑑魏主獻曰選舉勿取有名々々如

畫地作餅不可啖也晉書張翰曰使我有身後名

不如即時一盃酒

智慧老子云大道廢有仁義智慧

出有大偽王介甫注云智者知也愚者察也以其有知

有察此大偽所以生也 息肩注云不幸而又有小智  
小慧者竊仁義而行之則偽自此滋乱自此始  
又老子曰絶聖弃智

煩惱 大智度論曰煩惱者能令心煩作惱故名煩惱又  
曰屬煩惱屬瞋屬痴是名煩惱 大藏一覽 詳や

侍てば言ひてあるハ誠此智のあり

佛の有りては佛智は智小智世智便聰の類  
也 眞實の智ハ因鏡平等觀察成作是と佛心  
は四智といふと体と法界と云法界は用ハ四智也  
其体用を一心有り 在元の実智といふと愚なるが  
ごとく 嬰兒はよく中央之帝方渾沌と云是  
なり 我儒より賢智といふと生知の智知は

智舜の大知これなり 賢智ハ眞實乃智のあり  
ず良知の智是非れ智是又眞實なりゆへ  
致知と大智はよくとそなるなり

不可ハ一條也 莊子齊物論云方可方不可方不  
可方可又云不可不可不可物固有所以然物固有  
所可無物不然無物不可故道通為一

是善惡是非不可不然曲直邪正一切世の物  
論と有るものたるなり

何なり善とありふハ天をれ善惡不二六祖云不思  
善不思惡とあるに色を

まことの人の 眞人と云 道遠遊云至人無已神  
人無功聖人無名 梁武帝建寺度僧達磨曰無功德

名利世界よりなる教誨の詞、應映なり

は既名利よりなる者といふ、めて筆より  
その不あり、つくゆる、善好の、  
又台教とて、つり利とて、  
と非し、も、事、に、あ、れ、を、  
れと、お、ま、さ、か、お、よ、天、子、  
力、以、り、ま、し、ひ、因、と、  
さ、い、ま、し、ひ、に、あ、ら、  
盗、臣、ら、も、あ、り、  
方、に、つ、ま、よ、あ、ら、  
禍、と、  
教、り、

求るもの、い、ゆ、ま、  
備、く、  
ま、行、の、  
流、つ、り、  
お、は、  
然、し、  
仙、と、  
一、  
せ、  
成、  
又、  
も、

悪人の名は残さるべきと傳へ具と残さる事いり  
え名くゆり又不肖るれ毎ち約のあめ生れ  
或は名くさふいといきくま又智賢るれごめぬ  
ありは貧賤な事といつらば此は發策な  
れど下の約は佛光の見解を以て決する事  
口は可不可の一條として煩悩得失のあり  
ひ小於くざるをいふは道とす是は莊子の  
物論のやと金剛經の應無所住而生其心の  
義小を記す福ありきと水上の菰芦とふ  
我乃とあらず不貪を室とするは氏利  
より而して利を吾仁と察とするは玩好の  
物とすつとも守一人の私にあらずして天下の

利あり今も克舜の心あり則克舜の名あり  
人の性善るれば人々皆賢徳あるべし  
内あれば外あり實あるは名あり如何ぞ仁義  
を名て名をなさん賢人の可もなく不ありも  
形一は此佛光の引合をみる其のまはさ  
而も不問あり可もれく不可も好えらるる義  
あり義ありまご付は空しくしてそのつらみあり  
小ありは名をなさん賢人の可もなく不ありも  
ちりてりありもあらずして如何ぞ仁義と  
りて日用の事なり森羅万象のつらみ事  
也とみるゆへに名利を名て生起す名をば名て  
いみまがるべし行ふは善好

我々ともいふをめむ向との工まきよのたのむは  
 うらまやそ兼好が兼好ありたりともや  
 古人云豈曾點つ見解ありんや又彦子工  
 みや

名利此要をりしり  
 此要の二字行交也註字  
 盜跖篇小興名就利と云て下乃向小非以要  
 名譽也とありり要の字の假名付しつと念を  
 誤りてまはる也

戒人法然上人の念佛の耐睡あはれりて行を  
 ありゆる事いひていひりてやめゆるん

たれば目たきあそんやど念佛し終てころ  
 きりりたりたりとなうとあつとをり又往生の一定と  
 おりハ一定不定と云ハ不定也といはれりこ  
 決したるもいひるも念佛をたは性  
 生とくもいひれりありあはれ又をり

法然上人 源空也姓漆間氏美作國稻垣人也  
 又時國母奈氏長承二年四月七日生年十五從延  
 曆寺功德院皇因剃落受戒三期之間通受台教  
 又從黑谷睿空稟密乘及大乘律凡大藏經律論  
 他宗章疏靡不檢閱晚見源信往生要集乃棄所  
 業倡淨土專念之宗承安四年出黑谷居洛東吉  
 水盛說專修及因頓菩薩大戒緇白靡然向風

嘉應帝召入宮受戒藤相國兼實延問淨土  
之事空述選撰集呈之專修之徒取為秘要  
建永二年二月竄讚州建曆元年詔追赴都  
城二年正月居大谷染疾其徒安弥陀像於  
床頭且為願終助標空曰仏菩薩真身今又  
未也二十五日高唱佛号諸徒助和午時著  
傳持之慈覺僧伽梨頭北面西誦光明遍昭偈  
而寂年八十臘六十六元亨釈書卷五

昔韋提希夫人於如來十六の親慈を用く  
是淨土念佛の始也其外修多羅の教を以て  
凡そより龍樹天親は二菩薩といはれしは

中華にてハ東晋の法師庐山へ入て蓮社を  
結ぶ曇鸞高道緯を續して宗をひろむ天台大  
師も浄土十観論を作て世に好ぶ唐に世に  
及びて善導盛り唱ふは道俗男女共々  
かぶ事風よ及びり弟の彌陀此也  
とぞ人中尊の入り涼の沙門も善導の  
法もよ法人の著述多々れた天台十観善導の  
疏義もよよとて急ぐゆり本物にハ空也  
上人初てよとあるは佛の法生要集とあり  
て深く信ありある安養の生所其は法然と  
人ありは法然の法をよとありてあり  
くいはれしと他宗をよとありてあり

他家より法然も往生要集を名く是り知りて  
浄土家より此の善導の書を讀てさうはうの  
又善導の書ありていよく他念なきやゆ  
月輪相國の爲に作しは撰集今の代に  
家の授受お侍とあるん其つ人多かり或は  
即便往生と云ふ衆生往生をば誦読も正受とこ  
ういふの大教ありて既に十劫以前成佛して  
一切衆生も悉皆弥陀回向し成佛を今日唱へ念  
佛は其佛恩を報ずるあり或は為得往生と云ふ  
未知れ凡多の罪をたたりて地獄に處へる  
つとび弥陀を信ぜれば衆罪皆消滅して極樂  
國にお往生あり也或は又今一念よなまけは

かゝく信ずる何抄解して捨つぬま何決定  
往生と思ひて是れは信々名づけしこれ一  
期のるし念佛の報謝ありと云ふ或は又臨終  
念佛をばはうれを佛菩薩の来迎にあつ  
るもいふがくまうく成ゆゑ衆多あり又  
往來の西方よする也西方の西方にあつては又  
亦南の西方なりと云ふ西方を清浄國也念佛の  
清浄の也阿弥陀を清浄力也身心出りて  
不二なる念の弥陀佛極樂國におなり也亦命  
無量りの人の梵語は阿弥陀といふなり是れ  
佛りを往生と名づく一切の形ありのなり  
心は虚空にこころなるよありん悟と云量壽

定もも也海もももの八十万億出さるる物の  
 去不遠也をくハ弱水の万里を隔るる蓮  
 葉もも力あり蓮葉十二葉ありがくハ雲鳥  
 此丹後を焼きて念佛を修し呂洞賓が袖  
 裏の青蛇を抛て黄龍も来りハ身兼蓮葉  
 を唯心淨出ようりなりハ唯心長生不死  
 とくもも活きして寿命無常ありといふも  
 子にまじりて居るはあはれなるべしこれ  
 も念佛の弊を承い又よく知べき也いせ乃貧  
 賤飢寒にらるるも若く早に死して極あまじ  
 まるべしとていふもくもく水火に入るあり  
 又一くも念佛ありかして無常罪を消滅と  
 きて持ていふもくもく此法はる者もあり又男女  
 戒すくめ入るを却て法を犯すは法を犯す  
 安樂が六條河原とて斬るがとくもくあり  
 又思ひ入るをくもくいふもくもく  
 盗してはくも念佛もれもくもく難に  
 妄念あり場をくもりのハ浄土門の罪人なり  
 一くもく蓮花の淤泥より出て泥にうぬる  
 一くもく世のあはれ海邊即寂光と蓮花園  
 ともくもく也念佛ありもの多きもた  
 亦一くもくいふもくもく筆に戸を閉る  
 心あらん人いふもくもく

因幡國イナバの何の入道いりだうよりお供のむすめより  
よりうまて人あふひさりたるはまじき  
りとも粟アハとろい食てしつゝおたふくつゝ  
さうらねがかりいさふもの人よおのりいあ  
うぶそおやゆつゝりり

ついでにわらわりのあり  
粟アハをのこふして 奥本イ小粟アハあふの部ヒナ

東六条町トウロクジョウは老ラウたあり常に大豆マメと食てまよ  
米コメとくらひ人のほくゆをとも豆腐トウフと煮てくらを  
くらと人られ豆マメはまざり又伊豆イヅ國クニの湯ユふ  
或人オシトはむじめあり五穀ゴコクとくらむすたふ菜ナとら

とくつらかもは或人オシト小嫁コメけつとら

五月イチゴ日ニチ賀カ茂モれくく馬ウマとんゆりよ車クルマの糸イトよ  
雜人ザシまへつゝとんゆりよ者モノおりて庭ニワの  
きこいよりねどし人たかきららみてわあ  
くぬきやうもさうらりけりいびりひかりあふ  
らのまよ法師ホウシおわらそ木のまよははい井イて  
物モノらありよりつまやうつゝうチウ懸ケて落オぬよ  
けよ因幡イナバの湯ユとて夜ヨいなりあれとる人あざ  
かりけいみてせのちれ若ワカくれあふぬ枝エダの  
よりそやまにらりて掃ハキあつゝんよつゝいあ

我々よふと云ふ事なく生れたるも  
今よりあつらん物をわらへて物とて目と  
ををあるるりてふたはまきりて物とていひ  
れは前なる人々毎にしつゝをいひてむと  
うもふとひてうねりてをえりてうへを治  
つてはとわりてよび入りてさうねりて  
ぬん心して胸にあつたりたりや人本るあ  
ハ河よりりて物と感ざる事なれりあつ

六月五日賀茂丸

元亨釈書廿八一演法師欲安觀音像廣求靈區  
負觀中到平安城東北鴨河西岸于時地搖震

紫雲降垂蓮花紛乱奇香薰郁演喜而拈伽藍  
以故号感應寺一日老翁持釣竿出河中詔演  
曰我此地之主也自今應為護伽藍神我有神  
力能除魔障去疫癘又結好夫婦調適產育  
所謂牛頭天王者也我好眠一歲三百六十日只  
五月九日醒餘日皆卧端午之朝初起向天吐氣其  
氣或為雲霞或為雨露觸分不同其所觸或為藥  
或為毒或為惡瘡或為疾疫皆是有情業感  
也非我強為也言已形隱演錄神言奏朝勅黃  
門侍郎藤長良就其地七日夜行道念誦以報  
神德  
一演法師之大中臣氏洛城人なり

くくくし戸 競馬と云なり

世にあらぬもの 深氏帝亦ふあらぬもの物に云ん

花鳥よるま物あはらぬものやどくつふがこと

萬葉才九詠浦島子歌小世間之愚人之吾妹

児尔 せりくるり義あり

左傳 晋悼公周子有兒無慧不辨菽麥故不可

立杜預曰菽大豆麥殊形易別故以為痴者

候不慧蓋世所謂白痴

人本心小あはれはも 遊仙窟云心非木石豈忘

深恩 白氏文集人非木石皆有情不如不遇頑

城也

伊勢物語しりし物とありたり女をさうり

りし月日してげさといふありありあはれ

ふらりしやたのひたむ

唐橋中將くしふ人の子に行雅僧都とて教相

人の師より傍ありたり氣れらる病ありて年

やうくともくるわきも鼻の中あはかりて息も出

りしつらたれは油くく小はくつらたれどつら

かりて目眉額あはれももれもひてうらおひも

物もろくす二は葬の面のやうめもろくがた

あはれ鬼のふにありて目いひてまはれ

類の如く鼻よりなりをいへりて乃ち八坊のうち一人  
よもつていざらぬをいへりて年久しくありては成  
づつて成て死すなりかゝる病も事平に  
ありきり

唐橋 村と漁氏久我乃庶流あり

唐橋 権大納言正二

大納言正二

侍従正五下

通賢

雅親

通親

参議中將正三

行雅 僧都

教相 真言宗の經論般若教を學と教相とし

おころひとまらむと事おらふ

氣れあがり 津比若菜下に氣のつかりゆりや

うりたわひたれハ眉額おどろけて目れと

たゆふあり

二の舞のありて 伶人の舞の向也夫亦

ておそゆきき也安摩うそわき或舞あり

其次小舞と二れ舞

鬼れくふにありて 曾燈新詔小載る焉

大異が鬼穴み入て鬼のさし小成てより

これハ里人ともたろきて近侍らざるこた

りひ合をゆる

此後奇異れ病のを事といひ安小ぢるよ

莊子 人間世 又離疏者願隱於尙肩高於

頂會撮指天五管在上兩髀為脅註云會撮髻

也五管五臟之喻也



春のくれつゝいづれやうに艶エシなりうらうらにいづ  
 かぬ家持たたくあつくまきものありて巻よ敷志  
 やまごころ花んさささるゝとありて入てくれむ  
 何れゆゑに皆おろし〜てさび〜さびにふ  
 いさそ妻戸はよれたほどにあよさるひ藤ヒメれを  
 あれよりさささるゝさささるゝ胃イれ〜  
 びりりして打さけさるゝさささるゝさささるゝ  
 由そそれのさささるゝさささるゝさささるゝ  
 ねんさるゝさささるゝさささるゝさささるゝ  
 えんさるゝさささるゝさささるゝさささるゝ  
 艶エシ湯ユれ景ケイの旂ハタあり  
 花んさささるゝさささるゝ

有花使チ合ゴつ主人莫ム同ト誰ナニ

白氏文集 遠ト見ミ人家花使チ入イ不フ稱チ也ヤ賤セ

与ヨ秋キ跡ト

何れや〜竹のあみさるゝのうらうらとわらわら  
 の月影いづれあひさるゝさささるゝさささるゝ  
 狩衣カキヌよ〜れ〜ぬさささるゝさささるゝ  
 何れや〜ありさささるゝさささるゝさささるゝ  
 何れや〜と摘ヒ葉ハのあみさるゝさささるゝ  
 笛フエをえたり〜さささるゝさささるゝ  
 づき人もあ〜さささるゝさささるゝ  
 しくてさささるゝさささるゝさささるゝ

まことに揺つたあつらうりよ入ぬ

ほやかきなり コノロナリ

指衣コキハラサキこびりぬき コキルナリ 濃紫コキルナリ濃紅コキルナリのふき

襟ヒモラジ赤アカのりぬき ヒモキイロは紫ムラサキ色イロなり

ゆつたきなり ニヒ似ニヒかニヒつら義ニヒなり

ゆやなり ヒキ希ヒキ本ヒキにゆヒキやうヒキふヒキあヒキらヒキるヒキ海ヒキは 細汗源ヒキ氏ヒキ

いかなの露ヒキにきゆらつ ヒキそがらヒキのヒキゆヒキ也

右今ヒキゆヒキらヒキのヒキ糸ヒキにヒキをヒキらヒキつヒキ言ヒキふヒキも

ゆゆヒキきヒキぬ

えヒキをヒキらヒキず ヒキあヒキもヒキつらヒキばヒキ向ヒキひヒキきヒキ義ヒキ也

吹ヒキきヒキさヒキひ ヒキ手ヒキどヒキゆヒキみヒキ口ヒキはヒキらヒキるヒキのヒキ敷ヒキあり

又ゆヒキよヒキやヒキじヒキ義ヒキもヒキあり ヒキ又ヒキすヒキまヒキひヒキ義ヒキ也

たゆヒキじヒキのヒキあヒキはヒキあり

はヒキ股ヒキ上ヒキのヒキ股ヒキとヒキぬヒキみヒキをヒキるヒキれ ヒキ赤ヒキ波ヒキがヒキ赤ヒキ管ヒキ

推ヒキとヒキぬヒキて ヒキ風ヒキ水ヒキ洞ヒキはヒキあヒキまヒキびヒキり ヒキ景ヒキ氣ヒキあヒキらヒキり

はヒキえヒキくヒキゆヒキり ヒキ男ヒキ色ヒキはヒキ半ヒキのヒキ歴ヒキ代ヒキのヒキ史ヒキはヒキ何ヒキ

くヒキみヒキくヒキらヒキり ヒキ大ヒキ明ヒキ國ヒキへヒキ入ヒキ入ヒキのヒキ口ヒキもヒキ湖ヒキ廣ヒキ道ヒキ

くヒキまヒキ男ヒキ色ヒキはヒキくヒキとヒキ裁ヒキ尾ヒキとヒキふヒキくヒキらヒキるヒキもヒキさヒキ

もヒキあヒキらヒキるヒキもヒキさヒキ

もヒキあヒキらヒキるヒキもヒキさヒキ

もヒキあヒキらヒキるヒキもヒキさヒキ

揺ヒキらヒキるヒキ車ヒキはヒキんヒキゆヒキりヒキもヒキ教ヒキよりヒキ目ヒキにヒキまヒキるヒキん

りヒキとヒキ下ヒキ入ヒキらヒキるヒキもヒキあヒキらヒキるヒキもヒキさヒキ

清く浄佛事なむさきふふやといふ山堂の  
くた法師ごもまのりたり釈室おらふ山と  
そられらりうううにわひと力なきむ  
あらしに寝ぬらうい水の廊よりふ女房れを  
い風よりいなき人めなれ山里もいらばんら  
くひもさういふさきよあげと秋はらういささ  
あまの露よりづりもささ法の香わごころましく  
雲水の香はごやと都のううあふ雲は  
あまもやごころらうて月のりれらもる事さ  
ごめが

は股と前股と一よまづげらるる本をいふあ  
ゆいよ

榻 和名集榻 知末也車をまてたぐ物あり  
くうかをれやうなるもの也

女房のまの風よりいあごようい用名とあ  
ないうをいたさ物の句也 源氏末をよりちし  
うひはらうい風よりいなるまを末のま  
人もおらういよめ

出れ書かごころま 加言とあり

源氏幻をつれく我をたうまなれ目と  
くくう向いまひのまをね  
又相ふふ又さういふまの夜まを  
くさうまを



拜ありきバ又方々拜とせりける後鑑湖又  
かたけて山野をめぐりては時の人方家士と  
号せり力まかりてのち以人玄英先せと号し  
けりかたけ事もせよありける事よしと  
皇朝類苑四十六江南邊鎬梁博寡斬唯好叔氏  
初從軍平建州凡所克捷惟務全活建人德之号  
為邊羅漢及克湘潭鎬為統軍諸將欲縱掠獨鎬  
不允軍入其城巷不改市潭人益嘉之謂之邊菩  
薩及帥於潭政出多門絶無威断惟事僧佛楚人  
失望謂之邊和尚

柳ヤナキ此多カウ強盜カウ法中カウ号する傍多カウくカウび  
くカウび強盜カウありあひくカウびゆカウくカウあカウらカウみカウ瓜カウつけカウまカウ  
るカウ

南朝強盜法師と號する傍あり忍人あり  
小師ありて盜賊と号せしむる人の家多カウくカウび  
入る人もありて入る人もあり財物とり  
うりて人もありてこれかたけ用ありん時  
うりてくカウふ久カウくカウて賊徒と号するあ忍を  
あカウくカウあ若小怒うカウめんカウおカウふカウありカウ是カウみカウあり  
て強盜法師といふ名を得たりくカウりカウくカウ沙カウ和カウ  
集カウるカウるカウり  
りれ名ありんはこれ事春秋傳ふカウくカウりカウとカウ存

世の経略セリゴをくわたりて盗賊多かるるを盗  
 跡セキと号せり六内イロウチに悪名をられ人小ぶりてり  
 有りて衛エイの志の名を悪く云これ臣シに名を云  
 若あれど必しも毎トモに悪人アクニを定めりて偽ウソ  
 如ナリいふひを名をられも叔孫シヤクソク侍臣シヤクシを討て其  
 子コと并孫ヒナノ偽ウソ如ナリと名付け鳩夷コウイハ馬カは波ハとてはく  
 まは谷也ヤ兵コウ主シを子シ骨カネをりりて殺シを荒シ羅ロろ  
 れと戒イシて之レを鳩夷コウイ子シ皮ヒと名せりてあり是レもよ  
 こそあるまは名成ナずても実コトと名せりてありひはハ  
 人をあやまり事あるごとくされども義年ギネンが  
 伯父ハクフの義廣ギクワウとありつゝより悪深アクシをよみれ景清カゲキヨ  
 が伯父ハクフ大目ダイメといつり沙門シャモンを殺シり故コに悪七アクシチ兵衛ヘイエイと  
 いふかぐ〜

戒人清水ケイジンシズミ下シタりりりるも若ニくはなれりつれり  
 有りて道ミチすつとありていひりてりなれハ凡ソコ  
 出イる何事ナニコトをかくいひの跡アトなきやひたれども人  
 もきひを成ナりひやとありておと成ナるのれと  
 りりりてりてやいひりて時トキかき御ミあり終ハ  
 死シぬる也ナリとてふやいひるは敵トク山ヤマに思オモへ  
 おりてまじやとてそのやいひりんと思オモへかく

尸ぞうしこいひりる部さむりりん  
清水

これひりり河 萬葉内さうさうりりたの  
まゆねけりるひもさうりりあかも

古今まてゆらん人さうめんよーちまのこ  
ありりるさうさうねもひりり

毛詩抑風終風篇寤言不寐願言則嚏 註曰我甚  
憂悼而不能寐汝思我心如是則嚏今俗人嚏  
云人道我杜古遺語也

瑣碎錄曰白噴嚏子日酒食卯日大吉辰日婚合于  
日喜事酉日客至戌日嫉思亥日君子思餘皆凶

漢書藝文志嚏耳鳴 雜白十六卷 師古曰嚏

李濟翁資暇集今人每嚏必自祝音了計反所祈多案

郡終風篇注願於思也言於我也蓋他人思我  
我則嚏之也鄭又稱古遺語每嚏云人道我以

為他人說我々則嚏杜正得其願言者非祝願  
之願非語言之言今則自祝乃由誤解詩句爾

容齋隨筆卷四云今人噴嚏不止者必噉唾祝  
云有人說我婦人尤甚云嚏音帝鼻氣

由カ和福カ 日本紀才一定其禁厭  
之法

光親ミツチカハ院シヤウの最勝サイセウ海カイより一ヒトとありひらりと仰  
あへりきれて供湯クダウをのびきれて念ネンさうきさうきとて  
念ネンり〜〜〜の衝ツイ堂カサ子と山ミ麓スの中ナカへ入り入入て  
所トコロ出出よりより女メ房ボウあはれきたる惟ただよき事コトにてぐれと  
中ナカあはれおれはる減ユクゆするまひるじふとちよあ事コト  
ありとく之これに〜〜〜感カンさうをたまひひけるしう

光親ミツチカ

東鑑トウカン廿五ニジュウゴ兼久ケンキウ三年七月十日

按察アセチヤ卿キョウ

光親去月出家  
法名西親

者シヤ為ナリ武田タケダ五郎ゴロウ信光

〜願ネガヒ下シタ向ムカヒ而シテ鑓ヤシ倉クラ使シ相アイ逢アヒ于テ駿河スエノ國クニ東ヒガシ返マゼ  
邊ヘリ依ヨ觸ス可カ誅ス由ヨリ於テ加カ左サ坂サカ梟ウ首クビ訖ス時トキ年ネン四シ十ジュウ  
六ロク日ニチ此コノ死シ為ナリ無ム双スウ宦クワン臣シ又マタ家ケ門カド貫クワン首クビ宏オホ才サイ優ユウ  
長ナガ也ヤ々々度タビ次ツギ第ダイ殊ス成ス競ケイ戰セン忠チウ頻ヒン有アリ達タツ君キミ於テ

正マサ慮リョ之ノ如ニ諫ケン議ギ之ノ趣ス於テ背セ敷シ慮リョ之ノ間マ雜サマ進シ退ス  
惟ただ谷ヤ書シヤ下カ追ツイ討トウ宣セン旨シ忠チウ臣シ法ホウ諫ケン而シテ隨ツ之ノ謂イハ歎カ之ノ  
諷フウ諫ケン申マシ狀シヤウ教ケウ十ジュウ通ツウ殘ザン苗メウ山サン河カ後コト日ニチ披ヒ露ロ之ノ時トキ  
武ブ別ベツ後コト梅バイ惱ノウ丹タン府フ之ノ

又マタ源ゲン光クワウ行コウ海カイ道ダウ記キに光親ミツチカの事コトあり  
はいふまじの衝ツイ堂カサ子も筑ツク意イもとちりまらとぶの  
やうなりおありあり  
知チんン〜〜〜のうらやまあり〜〜也  
此コノ段ダンの心ココロ最サイ勝セウ極キョクに奉ホウ行コウ〜〜〜威イ儀イをたぐ  
うふいしゆあく物モノくひら〜〜しきりはい〜〜を  
そのま〜〜〜とく〜〜のうらやまあり〜〜か

まゝに器物ウツバをわしと病みして出たよよもあはれ  
まゝに器物ウツバを入れて女房よりばくばくはなまあはれ  
その目を禪カウチ自カウチあればきりつとあどおどろ  
ゆふありそれと有識ユウシキのつるまひありとおおと  
けりくちもよりのとあひゆるなまゝにバ夫のおに  
てと甲冑カウチめ士のサ夢バク祥バクせざるがごとし

老來て始て道ぞりんまうとれあるき墳ツツ  
おぼくは是少年お人せつらけりよ病とあはれ  
忽トに方女カウチふんカウチとすり付カウチを初カウチておわりの  
のあやう終り事いあはれあやまりとつら

他のもにあはれカウチの事とせらるゝゆり  
すつとふんカウチの事とせらるゝゆり  
時極カウチもあひあはれ人カウチの事とせらるゝゆり  
ゆり事とふんカウチの事とせらるゝゆり  
さあはれハあはれはせのふんカウチの事とせらるゝゆり  
とむり心もあはれやうカウチの事とせらるゝゆり  
人來て自他の事とせらるゝゆり  
ありてまゝに物々カウチの事とせらるゝゆり  
念佛カウチしてはあはれは生と遂カウチたりと禪カウチ林カウチの十因カウチ  
とゆり心カウチ戒カウチといあはれカウチの事とせらるゝゆり  
そめなり事カウチ成カウチ思カウチひてあはれカウチの事とせらるゝゆり  
小ねく常カウチいふとあはれカウチの事とせらるゝゆり

老ありてはげめて老と

朱文公勸学文勿謂今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年日月逝矣歲不我延嗚呼や

是推之也

ありき墳 李卓吾浄土決云古人句云莫待老来方学道

孤墳盡是少年人

待老来始学道在墳多是少年人

まごわりのものやまごわりの

莊子蘧伯玉行年六十而知五十九年之非

淵明歸去來 祥覺今是而昨非

はるまもも 新古今交遊りてはるまもの

かのまもも忘れさう思ふいもらんと

八雲抄小治りたまふまももハ草かりてつらぬりか

ご云つり時のる也 小鹿の角の来たるハ鹿の角

角と生ざり時一まももり又後とのふま月と角と

まももりたふま即ゆくまもも

禅林此十因 福林と寺ありま也 東山永観寺あり

ま永観律師の作まら往生十因一卷あり一廣

大善根故二衆罪消滅故三宿縁深厚故四光明

接取故五聖衆護持故六極樂他生故七三業相

麁故八三昧發得故九法身日休故十随順奉獻

故

心戒 或云心海欤

新撰撰九 心海上人一念不生をよめる茶を  
むきつぬさだの白糸の何となくしとまけし  
めらん 目十八心海上人命をいひるる人お  
おしむらんうきまふいぢりききつゝなれ

鹿長法師伊勢國より女の鬼を成す事とてこの  
ゆりしらるる事ありてまはせり日ごと  
り 京白川の人の鬼をよそし出たふ昨日の西園  
寺ままゆりしらるる 今日八夜へあるべしなごま  
うらうらあやういありしやうらうらうらうら

人もあつたらふあつたらふ人おれしと下たて鬼の事  
ついでしやまごそのは赤山ちと安宿流きく  
ゆりしは四條よりうらうらあやういありしやうら  
一條室町は鬼ありしはあやういありしやうら  
さうらりるるるるの津城あはれありしやうら  
うらうらあつたらふあつたらふ人おれしと下たて  
ゆりしはあつたらふあつたらふ人おれしと下たて  
浄土ありて清きまはあつたらふあつたらふ人おれし  
鬼れらうらうらあつたらふあつたらふ人おれしと云  
人もあつたらふあつたらふ人おれしと下たて

應長 延園院乃年号あり

并そのわりとらと ぼれてのわりとら也 似の字

と 将の字とち也 伊勢物部はあてつとを

つらとあり

院のゆ様也

とらとあり 一とありとらとありとら

はやくあつとあり事ハ 八雲抄ふとありとら

もともあつとありとらと

凡諸言妖言の世よおれつと事 古今事久

よあつとありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

とらとありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

とらとありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

虫魚よありとらと 帝とありとらと 八雲抄とありとらと

せくありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

当りとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

つらとありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

とらとありとらと 八雲抄とありとらと 八雲抄

宛山殿に御池より大井河の水を引りてくまんて  
大井のお氏よりお池を引水車をつくりてくまんり  
お池のお氏よりお池を引て数日よひお池を引てくまん  
くまんりより大方お池を引りてお池を引りてくまん  
と毎終よまらりてくまんりよりお池を引りてくまん  
池の里人よりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
くまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
水とくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
くまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて

宛山殿 宛山後塔城乃宛山の麓より山を引て  
てお池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんり

水とくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
お池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
家内よりお池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
お池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて

水車 東坡集十三無錫道中賦水車詩  
翻々聒々街尾鴉聲々確々蛭骨地分畦翠  
浪走雲陣刺水綠鍼抽稻牙注曰江浙間人  
目水車為龍骨車

水車は田を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
お池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
お池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて  
お池を引りてくまんりよりお池を引りてくまんりよりお池を引りて

鄂槌上卷四者於益城下原町邑自  
文政十一丁亥冬十一月二十日起筆同  
二十二日夕津一河之思 中村直衛

